

本物の味を 伝えていきます



渡邊 敏子さん
(48歳・大字鴻巣)

手間暇かけた味を

味覚の秋も過ぎ、木枯らしが吹く寒い日々が続く季節となりましたが、おいしい漬物ができる時期でもあります。漬物は食品貯蔵法の1つで、世界各地でつくられていますが、特に日本では日常生活に不可欠の食品として古くから種々の漬物がつくられています。

そこで今回は、漬物に子どものころから親しみ、伝統の味を守っていこうと漬物づくりに励んでいる渡邊敏子さんを訪ねました。

「秋田県で生まれ、育ちました。秋田ではお茶と一緒に漬物を出すのが一般的に行われてます。それぞれの家庭の味があって興味がありました。古河の農家に嫁いってから自分で漬けるようになりましたが、こちらでは秋田と違い、気温も高いので塩分を少なめにします。浅漬けにすると漬物がサラダ感覚で食べられるので、野菜をたくさん取ることができます。野菜は年間通してつくっていますので材料に不足はなく、いろいろな漬物をつくり

ぶんがくかん発
Vol.63

文学界新人賞受賞「大久保 操さん」

古河二高出身の作家といえば、永井路子の名前がすぐ思い浮かびますが、もうひとり文学という魔物に取り憑かれた女性がいたことをご存じでしょうか。そのひとの名は大久保操。

大久保操は、昭和10年7月27日東京池袋に生まれました。その後五霞村(現五霞町)に転居、古河二高では、文芸部に所属、文学への芽生えはこの頃であったと思われます。

二高卒業後は、福島で母親から習ったビーズ刺繍の仕事を始め、その後東京、浦和と転居。ビーズ刺繍は、日本伝統工芸展への出品を目指すほど打ち込みましたが、ビーズ玉の粗悪化や取引先の職人の廃業等が重なり昭和48年に廃業。ビーズと共に生きた前半生が終わりました。

ビーズ刺繍を廃業する数年前、後半生の核となる文学との出会いがありました。彼女に文学への道を歩ませるきっかけとなったのは、浦和市内で出会った二高の先輩でした。彼女は教育センターに勤める地方作家の一人でした。喫茶店で「私も小説が書きたい。」とふと漏らした言葉から文学を中心とした後半生が始まりました。

昭和46年10月にはビーズ刺繍をする地方都市の主婦の群像を描いた「昨夜は鮮か」が応募総数1342篇から選ばれ第33回文学界新人賞を受賞。同作は芥川賞の候補にもなり、翌年、埼玉文芸賞も受賞しています。文学界新人賞の選者のひとり作家の武田泰淳は、選評で「よく神経のゆきとどいた日本語の文章で、有吉佐和子と幸田文を足して2で割ったようでもあり、もう少し別の新しさもある。」と激賞しています。

昭和48年1月には、「参加」という作品で第5回

埼玉文学賞を受賞しましたが、その後の創作活動は順調とはいえませんでした。昭和50年に毎日新聞の「日本研究賞」に「単調の必要悪」という論文で見事入賞したものの、小説として活字となったものは数える程しかありません。

ビーズ刺繍を廃業してからは、人形店に勤めたあと、デパートの掃除婦、新幹線の掃除

人、宴会場の皿洗い、和服の仕立てと職業を転々としながらも「文学」を捨てませんでした。大久保操は本年2月25日帰らぬ人となりました(享年67)。まさに、文学に捧げた後半生だったとも言えるのではないのでしょうか。